「バビロンの流れのほとりから」

詩編１２６編

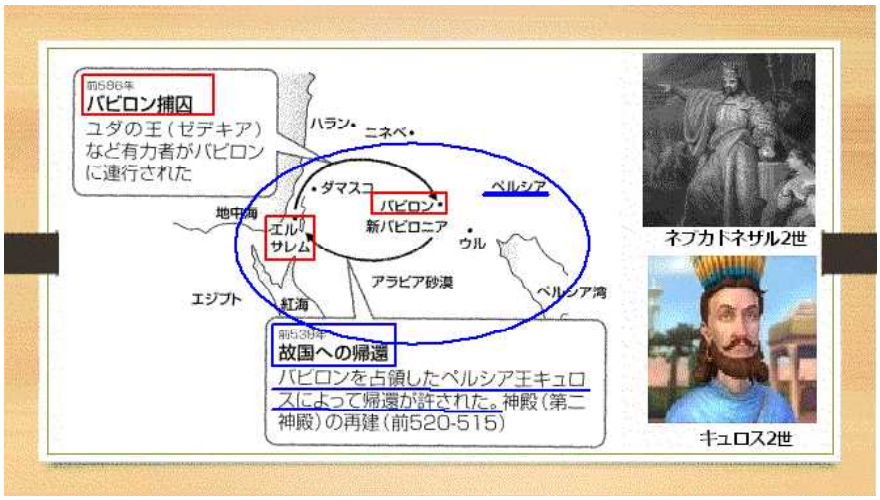
挽地茂男

2020.6.28　日本基督教団千歳丘教会

今日の詩編には、人生の浮き沈み、栄枯盛衰を表すような言葉が、回り灯籠（走馬燈）に映る影のように連続して出てまいります。笑いと涙、悲しみと喜び、落胆と心の昂揚、失意と希望、捕囚と帰還、（日照りの）乾期〔4-11月〕と（雨が大地を潤す）雨期〔12-3月〕、美しい夢と残酷な現実。この現実は、１節の「捕らわれ人」ということと関係しています。

１節。「主がシオン〔エルサレム〕の捕われ人を連れ帰られると聞いて／わたしたちは夢を見ている人のようになった。」つまり今日の詩編は、バビロン捕囚〔バビロンへの強制移住政策〕を背景にした歌だということが分かります。バビロン捕

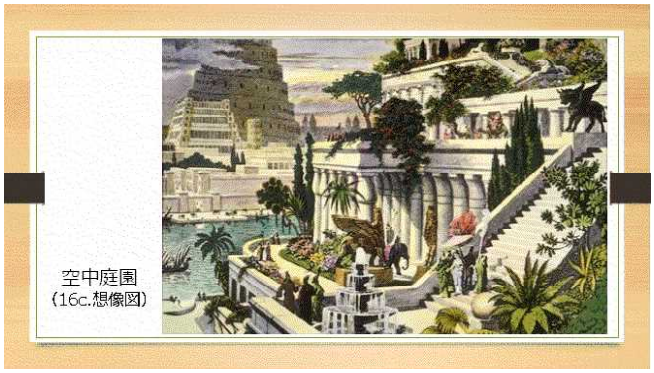
囚は、教科的な数字ではふつう紀元前５８６年（５８７年）が挙げられますが、大きな捕囚は３回にわたって為されていまして、教科書に出てくる紀元前５８６年という年号は２回目のバビロン捕囚に当たります。この５８６年前後に大きな捕囚が１回ずつ、紀元前５９７年と５８１年に行なわれています。第１回目の捕囚では、新バビロニア帝国の王ネブカドネザル２世(位605-562B.C.)が、紀元前５９７年にエルサレムを陥落させ入城を果たします（王下24:10以下）。そしてユダヤの王エホヤキムと彼を取り巻く有力者を殺害します。そして王族や有力者、若者や職人たちを捕虜として、記録にばらつきがありますが――3,023人（エレ52:28）,10,000人（王下24:14），8,000人（王下24:16）――最大10,000人の人たちを、新バビロニアに連行していきます。第２回の捕囚はそれから約１０年がたって、ネブカドネザルが傀儡統治するため



に擁立したユダヤ王ゼデキヤがエジプトに救援を求め、エジプトを盾にしてバビロニアに反旗を翻します。すると、その報復としてネブカドネザルは、エルサレム神殿を破壊してユダヤの政治的・宗教的な息の根を止めてしまいます。そしてゼデキヤの目をえぐり出し、ゼデキヤをはじめこの時の反乱者たちをバビロンに連行します。第３回目の捕囚では、ユダ王国は新バビロニア支配下のサマリア州に編入され、ユダヤ人の総督ゲダリヤが殺害され、745人のユダヤ人が捕囚民として連行されています（エレ52:30)。以上の３回の規模の大きな捕囚に加えて、小規模な捕囚は数回に亘って行われたようです。国家的建設作業のための労働力や技術者は必要に応じて、占領地から徴用されたのであります（エレ52:28-30)。このように捕囚政策は、征服した地域の政治的・経済的指導者たちを排除して反乱を防止し、職人の技術また労働力の確保を目的として行なわれました。捕囚政策（強制移住政策）は古代オリエント世界では頻繁に見られるものです。

　捕囚として連行された大部分のユダヤ人たちは、バビロニア(にあるニップル市近く)の灌漑用運河であるケバル川沿いに移住させられ、強制労働にかり出されました。また新バビロニア帝国の王ネブカドネザル２世(位605-562B.C.)は、大規模な建設事業を行っており、職人など熟練労働者は帝都バビロンに移住させられ建設事業に従事したのであります。今日の交読詩編として読みました詩編の１３７編はそのようなバビロンに連行され、強制労働に従事していたユダヤ人の詠んだ望郷の歌であります。

137:1 バビロンの流れのほとりに



座り／シオン〔エルサレム〕を思って、わたしたちは泣いた。137:2 竪琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。137:3 わたしたちを捕囚にした民が／歌をうたえと言うから／わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして／「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。〔日本人捕虜なら、さしずめ「桜、さくら」〕137:4 どうして歌うことができようか／主のための歌を、異教の地で。137:5 エルサレムよ／もしも、わたしがあなたを忘れるなら／わたしの右手はなえるがよい。137:6 わたしの舌は上顎にはり付くがよい／もしも、あなたを思わぬときがあるなら／もしも、エルサレムを／わたしの最大の喜びとしないなら。

強制的に連行されてきたバビロンから、故郷であるシオン〔エルサレム〕を思いながら泣いた、と切々と歌います。

しかし捕囚の地バビロニアで生活する彼らに、解放の知らせが飛び込んできます。紀元前５３９年、ペルシア王キュロス(クロス)２世率いるアケメネス朝ペルシア軍が新バビロニアを陥落させます。そして翌紀元前５３８年キュロス(クロス)２世による解放令が発布されます。最初の帰還民が総督ゼルバベルと大祭司イエシュアに導かれた、４万２，３６０人の捕囚民に加えて、７，５３７人の使用人や歌うたいたちが（エズ2:64-65)、約４か月の旅をした、という記録が残っています。それが第１節の背景です。

126:1 【都に上る歌。】主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて／わたしたちは夢を見ている人のようになった。続けて２節。126:2 そのときには、わたしたちの口に笑いが／舌に喜びの歌が満ちるであろう。そのときには、国々も言うであろう／「主はこの人々に、大きな業を成し遂げられた」

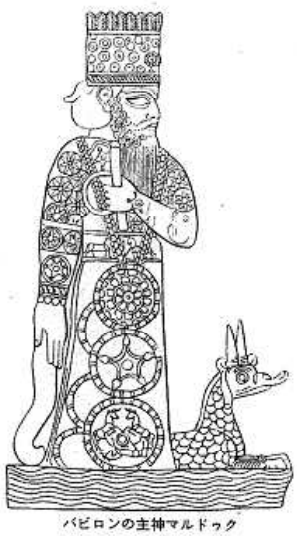
彼らの運命を大きく転換させる解放の日がやって来たのです。

しかしバビロニアでユダヤの民が築いた約５０年分の生活は、明日から解放だと言われても、そう簡単に変えられるものではありませんでした。ユダヤに帰るためには、現地人と結婚していた者は、

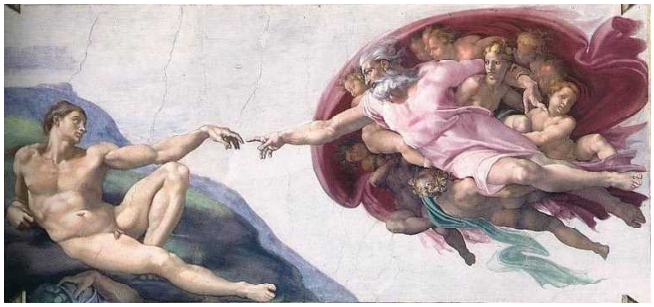
離婚さえ要求されたのです。ユダヤ人たちの名前や、月の呼び名などを見ると、彼らの生活が現地バビロニアの生活習慣や文化とどれほど融合しつつあったかを知ることができます。捕囚民の中にはバビロニア風の名前を持つ者が数多く現れます。バビロニアに連行されたユダヤの王エホヤキンの孫ゼルバベル（「バビロンの種」の意。バベルはヘブライ語で「バビロン」のこと）という名前を持っていますし、バビロニア月の名称が採用されて、「第一月」が「ニサンの月」と呼ばれ、「第二月」が「イヤルの月」と呼ばれるようになります。この月名は、現代イスラエルでも変わらずに使われています。また古代ヘブル文字に代わってアラム文字〔アラム語はアッシリア帝国、新バビロニア、アケメネス朝ペルシア帝国などの大帝国でも使われた当時の国際共通語です。アラム文字はフェニキア文字から作られた文字〕の草書体が使用されるようになります。

イシュタル門〔ペルガモン博物館（ベルリン）〕

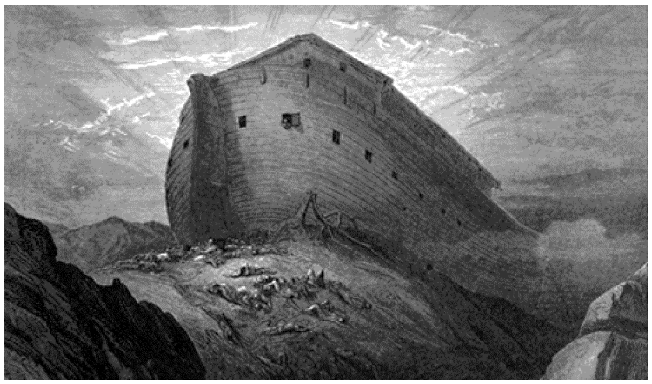
しかしユダヤの民は、一方的に新バビロニアの文化に影響されていたのではありません。バビロニアでの経験やバビロニアの文学や神話や宗教の影響は、創世記の１－１１章の「原初史」と呼ばれる部分に顕著に表れています。しかしこの原初史は、バビロニアでの経験や文学や神話や宗教と対峙することによって、むしろイスラエルの信仰をより明確に打ち出しているのです。古代の創造神話は、つねに、王権の正統性と結びつきます。バビロニアの世界創造神話『エヌマ・エリシュ』は、バビロニアの神マルドゥクを神々の王として讃えます。マルドゥクは女神ティアマトを撃破し、その肢体（体の各部位）から天地を創造します〔亡骸を二つに引き裂いてそれぞれを天と地に［乳房は山に、そのそばに泉が作られ］、その両眼からはチグリス川とユーフラテス川の二大河川を創ります。〕そのマルドゥクに愛され、地上におけるマルド


バビロンの主神マルドゥク

ゥクの代理人であるバビロニアの王の王権がこの神話によって権威づけられ、正統化されていったのです。それに対して、原初史は地上のいかなる王権も王国も積極的にその視野におさめることはしません。いわんや、それを正当化することなどしないのです。むしろ、聖書の神は、太陽神であるマルドゥクを超えて、神の言葉によって、世界も太陽も月も、万物を創造する神なのです。人間は王権の担い手として神の思し召しを受ける存在なのではなく、人間各人がそれぞれ、神によって神の像に創られ、神との応答関係の中に生きる存在として地上に生をを受けます。原初史が人間を社会的存在として語るときも、焦点を当てるのは、むしろ、最小の社会単位、すなわち、男と女であり、夫と妻であり、家族関係なのです。



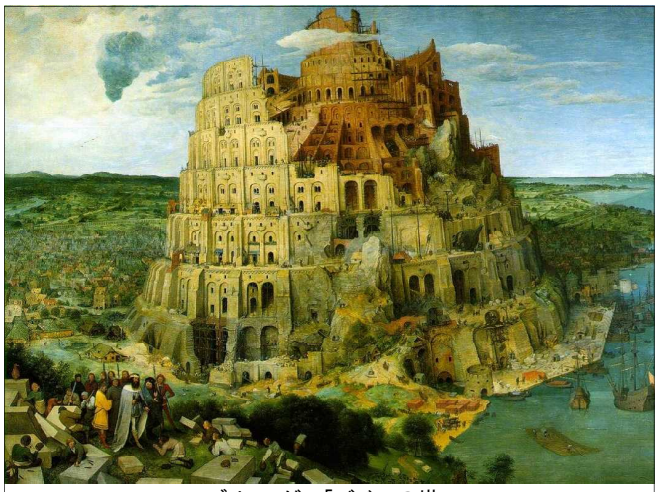
「ノアの箱舟」の背後に、主メールやバビロニアの洪水伝説があることも良く知られています〔『シュメル語の洪水物語』『アトラ(ム)・ハシース』『ギルガメシュ叙事詩』〕。これらの洪水物語は、前もって洪水の到来を知らされる人物が箱舟を建造し、家族や動物を乗船させ、人類を滅ぼす洪水の難から逃れること、洪水終了後に舟から鳥を放つこと、下船後に神に供犠（供え物）を献げること、といった物語の細部に至るまで、旧約聖書の洪水物語と共通しています。しかし、創世記（原初史）の洪水物語はシュメール・バビロニアの洪水物語の単なる翻訳ではありません。何よりもシュメール・バビロニアの洪水物語の多神教的性格が払拭されています。洪水がもたらされる理由を、『ギルガメシュ叙事詩』ではエンリル神の休息を妨げる人間の「騒々しさ」にあるとしているのに対して、聖書の洪水物語では、その理由が地上における人間の「悪」とされており、物語が倫理化されています。そして原初史全体が、人間の罪と



罰と救いを問題としています。また、箱舟を建造することによって人類を救いに導いたノアにあたる人物が、洪水後、シュメール・バビロニアの洪水物語では、神々に列せられる（神々に並ぶ存在にされる）という記述は、聖書ではきっぱりと否定されています。

　また「バベルの塔」の物語ですが、「バベルの塔」は〈ジグラット〉と呼ばれる高塔神殿の一つでありまして、当時のバビロンが誇っていた建築物の一つであります。〔なおヘブライ語で〈バベル〉というのはバビロンのことを指します（ＴＥＶは創10:10，11:9 で“Babylon”「バビロン」と訳している)。〕アッカド語〔古代バビロニア語〕では、〈バブ・イリ〉「神々の門」という意味でした。そこにそびえる〈ジグラット〉は「天と地の基礎なる家」（エ・テメン・アンキ）と呼ばれていたのです。つまりバビロンは神々の世界と地上を繋ぐ世界の中心とされたのです。しかし聖書は、主なる神が全地を混乱〈バラル(混乱)〉させたのでまた〈バベル〉（つまりバビロン）という名前になったと説明します〔新共同訳はその言語的説明を明記しています〕。すなわち旧約聖書の「バベルの塔」の物語はバビロン批判、あるいはバビロンが誇っていた文明批判の意味合いが強く出ているのです。実は、〈バベル〉と〈バラル(混乱させる)〉という動詞の間には音韻上の類似はあっても、語源的な繋がりはないのです。物語は語源的には無理な説明をあえて加えることによって、バベルに対する強烈な批判をここに籠めているのです。聖書は「神と人間の書」なのです。時代的な状況と制約、そして書いている人間の能力と限界、それらを通して、つまりそこに生きる人間と状況を通して神は重要なメッセージを伝えるのです。聖書は「神

発掘されたウルのジグラット


ブリューゲル「バベルの塔」

と人間の書」なのです。

バビロニアでの経験や文学や神話や宗教をイスラエルの信仰からとらえなおし、そのことによって彼らの宗教は、深みを増し、確立されていったので。彼らの信じる主なる神はバビロニアの主神マルドゥクを超える超越神として、世界の神として確信されるようになっていったのです。

その神が行動を起こします。「主がシオンの捕われ人を連れ帰られる。」主がわたしたちのために「主は…大きな業を成し遂げ」てくださる。そして３節。

126:3 主よ、わたしたちのために／大きな業を成し遂げてくださ

い。わたしたちは喜び祝うでしょう。

ここに時代と状況を、そしてその紆余曲折を貫く信仰があります。「主が…成し遂げてくださる。」主体は主なのです。歴史は人間が動かすものだと、わたしたちは歴史の一面を取らえて、それ以上の判断を停止するのです。歴史が、人間の悪と利己心と愚かさに左右されるという、歴史のダークサイドを見ることによって、心の中で「どうせ」と思っているのです。虚無を打ち抜く、善への意志を失っています。しかし詩編の３７編で詩人はこう歌います。３－６節。

37:3 主に信頼し、善を行え。この地に住み着き、信仰を糧とせよ。
37:4 主に自らをゆだねよ／主はあなたの心の願いをかなえてくださる。37:5 あなたの道を主にまかせよ。信頼せよ、主は計らい
37:6 あなたの正しさを光のように／あなたのための裁きを／真昼の光のように輝かせてくださる。

「主は…かなえてくださる。」「主が…成し遂げてくださる。」

さて今日の詩編を口語訳聖書で親しんでおられる方は「アレッ」と思われるかも知れません。口語

訳はこうです。２－３節（口語訳）。

126:2 その時われらの口は笑いで満たされ、われらの舌は喜びの声で満たされた。その時「主は彼らのために大いなる事をなされた」と／言った者が、もろもろの国民の中にあった。

126:3 主はわれらのために大いなる事をなされたので、われらは喜んだ。

わたしたちが使っている新共同訳聖書は未来形に訳しています。それに対して、口語訳は過去形に訳しているのです。どちらが正しいのでしょう。実は、ヘブライ語には時制がありません。あるのは〈完了形〉と〈未完了形〉です。分詞や不定詞が時のニュアンスを持つことがありますが、基本的には二つ〈完了形〉と〈未完了形〉です。行為が完了していることを示す〈完了形〉と、行為が未完了であることを示す〈未完了形〉です。ふつうヘブライ語文法の初歩の学習段階では、〈完了形〉を過去形に、〈未完了形〉を未来形に訳させます。しかし、やがてこれが通用しなくなります。どちらにでも訳せてしまうのです。例えば預言者は、まだ起こっていない未来のことを予言するのに、〈完了形〉を使います。それは確実なこととして捉えると、それは完了したこととして表現されるのです。イザヤ書９章２節。

暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。

救いの預言なのです。未来のことなのです。過去のことではありません。しかしイザヤにとっては確実なことなのです。預言者的〈完了形〉で言い表します。一方の〈未完了形〉は、完了していない行為を表わす表現なので、様々なニュアンスを抱え込むことになります。まだ完了していないので、願望を表現したり、まだ完了していない行為なので、すよるうにという命令になったり、繰り返し起こる行為は、行為が完了していないのと同じと見て、過去のことでも現在のことでも未来のことであっても〈未完了形〉で表現されます。時には特定の接続詞や副詞を伴って〈未完了形〉が〈完了形〉の代

わりをすることだってあります。過去か未来か、どちらか判断が難しい場合が多々あるのです。でも日本語に翻訳する場合は、過去か未来に決断しなければなりません。そして口語訳は、過去に統一し、共同訳は未来に統一しているのです。できれば、両方に理解できる曖昧な訳が可能であればいいのですが、日本語でも英語でもそれは無理です。ですから、わたしたちはこの箇所では、「主が大きな業を為してくださった」と過去形に読めば、それと同時に、「主が大きな業を為してくださる」と未来形にも読むことができますし、またそう読むべきなのです。過去を主と共に生きた人は、未来をまた主と共に生きるのです。信仰は、時を超えるのです。信仰の出来事が積み重なって、わたしたちは苦難の中にあっても主に信頼を起き続けることができるのです。そしてその主に願いを発するのです。４節。命令文です。

126:4 主よ、ネゲブに川の流れを導くかのように／わたしたちの捕われ人を連れ帰ってください。

主がなさる大きな業を、巧みな比喩で語ります。「ネゲブに川の流れを導くかのように。」ネゲブはもちろん砂漠です。砂漠に川、砂漠に水、それは潤いであり、恵みであり、喜びであり、奇跡であり、救いなのです。ネゲブはイスラエル南部に総面積13,000km²にわたって広がる広大な砂漠です〔ネゲブはそもそもは聖書ヘブライ語［古典ヘブライ語］で「南」の意。同国の行政上の南部地区の大部分を占めている。年間降水量は北部では500-1250 mm 南部にいたっては25 mm にすぎない〕。川はありません。けれど〈ワジ〉〔雨季の一時的な豪雨のときのみに水が流れる〕涸れ川があります。雨期になって雨が降りますと、その時には一応、川の体裁になるのですが、雨期が終わりますと、水は涸れてやがて川の蛇行した跡だけが残ります。その砂漠に川が流れる。今、運命の転換の時が来たのです。ネゲブの砂漠が、雨によって潤され、死に絶えたような涸れた土や、枯れ

ネゲブ砂漠の ein avdat

果てた植物がその生命を吹き返すように、今、捕囚の民として生きたその生涯が再び生命を吹き返そうとしているのです。そしてネゲブの〈ワジ〉が姿を変えて生命の〈水源〉として出現し、その川によって、小さな農地を耕し収穫を得ていた過去（日常）を思いつつ、民は歌うのです。５－６節。

126:5 涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。126:6 種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は／束ねた穂を背負い／喜びの歌をうたいながら帰ってくる。

この５－６節の表現を取り上げて、この詩編はもともと「雨乞いの祈り」であったと言う研究者たちがいます。エリヤの物語（列王記上17-18章）の背景にあるような干ばつによる特に農業を中心とする国家的被害を背景としてこの歌を読むと、涙と喜びの歌の対比、

種や穂という農事にかかわる表現がしっくりくるし、イスラエルの民の苦しみが手に取るように理解できるというのです。もしこの詩編を「雨乞いの祈り」と考えるならば、この詩編の５－６節は、恵みの雨による豊作を表すことになり、豊作に歓喜する人々の姿が浮かんできます。しかし刈り入れの喜びは、聖書ではもっと一般的に「喜び」を表現する比喩として使われます。例えば、イザヤ書９章２節。「9:2 あなたは深い喜びと／大きな楽しみをお与えになり／人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように…。」さらに１節の「捕われ人」という言葉の別の読みの可能性を指摘して、一般的な「繁栄の回復」「復興」を喜ぶ歌と考える研究者もいます。しかしこの歌が、本来は捕囚とは何の関係もない歌が適当に変形されて巡礼歌に仕立て直されたと、簡単に考えてはいけないと思います。人生が与える具体的な教訓は、計り知れない価値を持つからです。たとえ、この歌がもともと「復興」の歌であったとしても、神の恵みと信仰による復興の歌であり、また、この歌がもともと「雨

乞いの祈り」であったとしても、農事が農事に留まらず、労苦と喜びの落差が、主の業、主の働きを視野に入れることによって、大きな歓喜へと昇華していくのです。この詩は、雨を乞う祈りをささげつつ為される「農事の労苦と喜び」、失われた人生の繁栄を取り戻す「繁栄の回復」と「捕囚からの帰還」を重ねて二重、三重、ダブル・イメージ、トリプル・イメージで読んでいいのです。そこには、「明」と「暗」の対照が鮮やかです。「涙と共に種を蒔く人は」やがて「喜びの歌と共に刈り入れる」のです。「種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は」やがて「束ねた穂を背負い、喜びの歌をうたいながら帰ってくる」のです。主なる神様が「連れ帰」って下さる所、そこがわたしたちのいるべき所です。「主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて／わたしたちは夢を見ている人のようになった」(v. 1)。新しい１週も、神さまを信じて歩んでまいりましょう。

2020.6.28　日本基督教団千歳丘教会